

令和がスタートした1日、南さつま市で吹上浜砂の祭典が開幕した。平成最後の4月30日は前夜祭があり、時代の節目に鹿児島を代表する行事に立ち会えて感慨深い。

32回目を迎えた今年も市民や県内外の一般、海外彫刻家らが造った砂像約100基が並ぶ。取材して3年目だが、緻密で迫力ある作品はいつ見てもすごい。芸術的な城、丸みをうまく表現した人物、昆虫など、高い技術力と魂を感じる。

祭典は大勢の人の尽力によって、平成の30年間で大きく成長した。ただ、最近の市内の制作者を見ると、人口減少の影響もあり、市職員頼みの印象を受ける。昭和末期に始まったところは、青年会議

令和も愛されて

所が中心だったと聞く。民間を含め、後を継ぐ若手が増えてほしい。

県外の参加はありがたい。3年前の熊本地震の復興応援にと、熊本城を造る熊本市の崇城大学は3回目。1年ぶりに再会すると、驚くほど腕が上がっていた。「祭典を支える裏方に感謝」と話す高知県の彫刻家・松木由子さん(47)は参加当初は団体で、現在は1人で彫る。北海道教育大学旭川校は南さつま市と旭川市の姉妹都市盟約が縁で、昨年から駆け付けける。

三つ目の時代に突入した南さつまの一大イベント。「古里を盛り上げた」という関係者の情熱が変わらないのはうれしい。令和でも、多くの人々に愛されてほしい。

2019・5・3